

- 軍部に引きずられた昭和の日本
  - ▽「統帥権」＝軍隊の指揮権
  - ▽「陸海軍大臣現役武官制」＝陸海軍大臣は現役の大將、中將に限るという規定
- 日露戦争までの日本には「軍部」という言葉はなかった
  - ▽軍人社会一般を指して「軍界」といっていた
  - ▽社会主義に対して、強い政治意志をこめて「軍部」という言葉を使い出した
  - ▽39年4月、寺内正毅陸相は社会主義を病毒と決め付け「寸毫も軍部に侵入するを許さず」と訓示
- 軍隊に社会主義思想が広がるのを恐れた
  - ▽ヒューマニズム、人道主義から社会主義に入った人が多く、安部磯雄もクリスチャン
  - ▽幸徳秋水、堺枯川ら平民社の戦争反対にも神経を尖らせた
  - ▽荒畑寒村らは「伝道行商」で全国を行脚
  - ▽陸軍は各部隊に次官通達で「兵營に一切近付けるな」「軍人軍属と交際させるな」
  - ▽「血の日曜日」事件にも衝撃

**大逆事件**(たいぎやくじけん) 大逆罪は旧刑法で、天皇、皇太子、皇太孫に危害を加え、または加えようとした者は死刑とした規定。明治43年5月、明治天皇暗殺を企てたとして多数の社会主義者、無政府主義者を逮捕、44年1月幸徳秋水ら12人を処刑した

**血の日曜日** 明治38年1月22日の日曜日、ペテルブルクで皇帝への請願のため行進していた労働者やその家族に軍隊が発砲、死傷者は2000名にのぼった。民衆の不満が高まり、ロシア革命の発端となった

- ▽東京朝日「突如、ロシアの都に革命の烽火揚る」  
「極東の戦局をも顧みない不忠者」
- ▽革命の火が日本の皇室に及ぶのを恐れた

**寺内 正毅**(てらうち・まさたけ)

嘉永5(1852)～大正8(1919) 長州出身。元帥、陸軍大將。明治34年桂内閣の陸相となり初代朝鮮総督。大正5年首相となりシベリア出兵を強行、世論の批判を受け米騒動により総辞職した

**安部 磯雄**(あべ・いそお)

慶応1(1869)～昭和24(1949) 福岡県出身。同志社、早大教授。社会主義研究会、社会大衆党などを結成しキリスト教社会主義の指導者として活躍。学生野球の普及にも貢献した

**幸徳 秋水**(こうとく・しゅうすい)

明治4(1871)～明治44(1911) 高知県出身。本名伝次郎。社会主義者。万朝報に入社して日露戦争に非戦論を唱え、平民社を興して戦争反対を訴えた。無政府主義者となり大逆事件の首謀者として処刑。著書に「社会主義神髓」

**堺 枯川**(さかい・こせん)

明治3(1870)～昭和8(1933) 福岡県出身。本名利彦。社会主義者。万朝報記者を経て、幸徳らと平民新聞を創刊、日露戦争に反対した。日本社会党、日本共産党の創立に参加

**荒畑 寒村**(あらかた・かんそん)

明治20(1887)～昭和56(1981) 横浜生まれ。本名勝三。社会主義者、評論家。平民社の運動に参加、日本共産党の創立に加わったが、のち離党して労農運動の中心として活躍。戦後は日本社会党創立に参加、晩年は文筆活動に従事

- ▽ヨーロッパでは「明石工作」でロシアに革命を起こそうとしているのに、陸軍の心配も同じ
- ▽労働者のストには神経質になっていた
- ▽陸軍は内務省に社会主義取り締まりを強化させた

●戦後、労働争議や暴動が各地で頻発した

- ▽石川島造船所、小石川の砲兵工廠、呉海軍工廠
- ▽足尾銅山や別子銅山では軍隊出動
- ▽規律のやかましい軍隊でも兵隊の集団脱営
- ▽東京の歩兵第1連隊では「結党罪」で処罰

●西園寺公望内閣に、元老山県有朋は眉をひそめた

- ▽39年1月の新内閣発足1週間後には日本平民党、3週間後には日本社会党と、相次いで社会主義政党的結成が認められた
- ▽平民党は「普通選挙達成」がスローガン
- ▽直接国税1.5円以上納めないで選挙権がないので有権者は国民の1%余り、45万人
- ▽社会党が認められたのは、綱領に「国法の範囲内において社会主義を主張する」とあったから
- ▽「議会を通じてなんて生ぬるいことでは、社会主義は実現しない」と幸徳秋水
- ▽「国法の範囲内」を削り、直接行動、ゼネストを訴えたので、政府は解散命令

●山県を驚愕させるようなことが立て続けに起こった

- ▽40年11月3日の明治天皇誕生日。サンフランシスコの日本領事館の壁に「天皇暗殺宣言」ビラ
- ▽41年6月22日には「赤旗(せき)事件」
- ▽神田錦輝館での出獄同志歓迎会に、荒畑は赤い布に白テープで「無政府共産」の文字をはりつけた
- ▽荒畑と一緒に捕まった青年の落書が大騒ぎに
- ▽留置場の板壁に「一刀両断天王首 落日光寒巴黎城」のフランス革命を歌った漢詩
- ▽社会主義に甘い西園寺内閣は、山県にとってそのまま放任出来なくなった

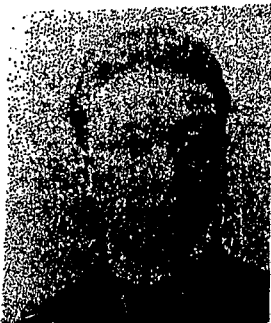
明石元二郎(あし・もとじろう)

元治1(1864)～大正8(1919)福岡藩出身で陸軍大将。駐露公使館付武官を経て日露開戦と共にヨーロッパを舞台にした謀略工作に当たり、ロシア国内の革命運動を扇動した。台湾総督

西園寺公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 薩摩藩の名家・九清華の出。王政復古で参与となり、戊辰戦争で転戦。フランスに10年留学してソルボンヌ大学卒。文相、政友会総裁を経て明治39年、44年の二度首相。パリ講和会議首席全権を務め、最後の元老として長く後

継首相の奏請にあたった(写真④は晩年⑤文相時代)



山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922)長州出身。元老。元帥、陸軍大将。奇兵隊を率い倒幕戦争に活躍。徴兵令を制定し、陸軍の大御所として君臨した。初代参謀部長、陸相、内相を歴任し二度組閣。藩閥政治家として、明治、大正の国界、陸軍を主導した

「陸仁君ニ与フ」と題したアジビラ  
 「陸仁君足下、憐レナル陸仁君足下、  
 足下ノ命ヤ旦タニ迫マレリ、爆裂弾  
 ハ足下ノ周囲ニアリテ将ニ破裂セン  
 トシツヽアリ。サラバ足下ヨ」

●全くのデッチ上げではなかった大逆事件

- ▽荒畑や堀がひっかからずすんだのは、赤旗事件で獄中にいたから。幸徳は郷里に帰っていた
- ▽長野県明科の職工宮下太吉や荒畑の内妻管野スガたち4人は爆弾を作り、計画も練っていた
- ▽宮下が最初に計画を持ちかけたのは幸徳
- ▽幸徳は実行の人じゃなく文章の人だ。荒畑が入獄中に、内妻の管野と親しくなったという反発もあり、計画の後半からは幸徳を遠ざけていた
- ▽初公判から1か月半余りのスピード裁判で幸徳ら12人の死刑を執行
- ▽女性でただ一人死刑になった管野について、荒畑は「結核に苦しみ、自分の過去に対する後悔もあって、終生恋を追って、恋に失敗した可哀相な女性でした」
- ▽新宮で「神様」と慕われた医師大石誠之助
- ▽駿河台に文化学院を開いた西村伊作は大石の甥

●病気を理由に突然内閣総辞職をした西園寺

- ▽理由が分からないまま「山県の毒殺」説が
- ▽真相がはっきりしたのは、内務大臣原敬の日記が戦後になって公開されてから
- ▽「社会主義取り締まりが不完全」との山県上奏を明かしてくれた徳大寺実則侍従長(西園寺の実兄)
- ▽山県は寺内に陸相辞職を求めた
- ▽陸軍大臣がいなくては内閣が作れない
- ▽政党嫌いの山県は、31年に日本で最初の政党内閣・大隈重信内閣が出来た時、陸海軍が政党に荒らされるのを心配した
- ▽陸海軍省の制度を改正し「陸海軍大臣は現役の大將、中將に限る」という規定を作った
- ▽「規則が軍服を着ている」と云われた寺内。御大山県の意向に逆らって辞職しなかったのは、規定の乱用にためらう気持ちがあったからか、それとも「伝家の宝刀」は抜かない所に意味があると思っただからか

●シンも強く決断力にも優れていた西園寺

- ▽首相としては伊藤博文に次ぐくらいの一級品

「原敬日記」より

六月二十三日 先日徳大寺侍従長より社会党取締に関し尋越したるに付、…本日参内し親しく侍従長と内談せしに、同人の内話によれば、山県が陛下に社会党取締の不完全なる事上奏せしに因り、陛下に於せられても御心配あり、…山県の陰険なる事今更驚くにも足らざれども、畢竟内閣を動かさんと欲して成功せざるに煩悶し此奸手段に出たるならん。…新橋より同車し絶えず談話をなしたるに、一言も政事談をなさず、無論社会党に言及せず、彼の性行は常に此くの如くなり

七月二日 西園寺の言う所によれば、寺内(陸相)は山県より其職を辞すべき旨勧誘せられたる由内密に物語れりと云う、蓋し山県は之により内閣を破壊せんとしたるものにて、山県の陰険は実に甚だしと云うべし

原 敬 (はら・たけし)

安政3(1856)～大正10(1921)盛岡出身。明治39年西園寺内閣内相となり、政友会総裁を経て大正7年首相。「平民宰相」と云われたが、東京駅で暗殺される

大隈 重信 (おおくま・じゆん)

天保9(1838)～大正11(1922)佐賀藩出身。31年板垣退助と共に初の政党内閣。大正3年再度組閣。早稲田大学の創始者

伊藤 博文 (いとう・ひろゆき)

天保12(1841)～明治42(1909)長州藩出身。元老。初代首相。憲法制定に尽力、枢密院議長、政友会総裁を歴任。組閣四度に及び明治の政界をリードした。初代韓国統監。ハルビンで暗殺される

- ▽地位に忿々としなない。しかし粘り腰のなさは、近衛文麿、細川護熙など公卿出身の政治家に共通
- ▽近衛の優柔不断ぶりを「会して議さず、議して決さず、決して行なわず」
- ▽生物学に興味を持たれた昭和天皇に、さらに研究を勧めたのは西園寺
- ▽西園寺は天皇をイギリス流の「君臨すれど統治せず」で教育した
- ▽軍部の一部から「天皇の教育を誤った」と二・二六事件などで命を狙われた

●西園寺の資質に早くから目をつけた岩倉具視

▽3歳の時に徳大寺家から養子に

▽養育の老女が「いやしくも西園寺家の当主です。煙草も召し上がれ。酒も今のうちから修業なさい」

清華家(世淵) 摂政関白の五摂家(近衛、鷹司、一条、九条、二条)に次ぎ、大臣、大将となれる家柄。久我、転法輪三条、西園寺、徳大寺、花山院、菊亭、大炊御門、広幡、醍醐の九家があるので九清華と云う

●維新の決意を固めさせた西園寺の一言

▽徳川慶喜上洛の知らせに色を失った御所では、鳥羽伏見の戦いを幕府と薩長の私闘にして、朝廷は関わりないことにしては、との意見が出た

▽西園寺は「この大切な時、勝てばその功を奪い、負ければその責任を逃れようとして私闘にする。そんなあいまいなことでは、天下の大事はついに去りましょうぞ」

●フランスに10年留学した西園寺

▽クレマンソーと親しくなり、生きた政治を学ぶ

▽グラント米大統領に会って「その外飾なきさま、真に悦ぶべし」

▽東洋自由新聞社長になったが、明治天皇の勅諭で辞任した。その時の上奏文に反骨精神

▽小さい時、一緒に相撲を取り合った仲

●岩倉具視は西園寺を後継者に

▽伊藤に西園寺の教育を託した

近衛 文麿(このゑ・みまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和12年以来三度組閣、大政翼賛会を創立。戦後、戦犯の出頭命令を受け服毒自殺した

二・二六事件 陸軍皇道派青年将校の起こしたクーデター事件。昭和12年2月26日未明、1400名の部隊で首相官邸などを襲撃、斎藤實内大臣、高橋是清蔵相らを射殺、永田町一帯を占領した。反乱は29日鎮圧されたが、陸軍は肅軍の名で発言権を強めた

岩倉 具視(いぐら・ともみ)

文政8(1825)～明治16(1883)公卿。倒幕運動に参加。維新後右大臣。岩倉使節団を率いて欧米視察。征韓論を退け、内治優先、天皇制確立の政策を進めた

クレマンソー(Georges Clemenceau)

1841～1929 フランスの政治家。第一次大戦末期に首相。戦後、パリ講和会議を主導しドイツへの厳しい制裁を主張

グラント(Ulysses S. Grant)

1822～1885 第18代米大統領。南北戦争で北軍総司令官として勝利した国民的英雄

西園寺の上奏文(題) ヒソカニ勅諭ノ深意ヲ考フルニ、其ノ旨ケダシニ。曰ク新聞ノ業ハ華族ノ徒ノヨロシク事トスベキニアラス、自由ノ論ハ、民心ヲ扇惑シテ、政ヲ害スルアリト。臣ヒソカニ思ヘラク、コレ大イニ然ラズ、…自由ノ論ヲ以テ害スルアリトナストキハ、サキノ詔ヲ下シテ、立憲ノ制ニ従フノ意ヲ宣セシ所以ハ果シテ何ノ故ゾヤ。

●西園寺は日清戦争さ中の明治27年、文相に

▽「朗らかな国民」を望んだ

▽非常時意識が強すぎてはいけない、悲壮ではいけない、悲憤慷慨しても、激越であつてもいけない

▽安部磯雄の授業を参観して「教育には、こうしたゆとりと自由さがなくてはいけない」

●36年7月、伊藤の後を継いで政友会総裁に

▽信念の人であり、遠く国家の将来に目を注ぐ人

▽軍事は素人の遠慮からか、軍部を押さえ込めなかった。これが伊藤博文と違うところ

▽昭和の日本が道を間違えたのは「政治を知らぬ軍人が政治に口を出し、軍事を知らぬ政治家が軍事に沈黙したことに始まる」

▽日露戦争後の日本の国防方針は、この西園寺内閣の時に作られた

▽国防という国の最高の政治課題が、総理大臣の知らないうちに決まってしまう。それを防げなかったところに、最初のつまずきがあつた

●陸軍はロシア、海軍はアメリカと分裂した国防方針

▽日露戦争の後、陸軍と海軍で環境が変わつた

▽セオドア・ルーズベルト大統領は、対日作戦計画「オレンジ・プラン」を準備させた

▽日本が国防方針を作つた明治40年、全く同じ年

▽カラー計画。対日作戦はオレンジ、日本の外交暗号にはレッド、パープル

●仲が悪かつた日本の陸軍と海軍

▽日本の国防方針は陸海軍対立の中で作られた

▽陸軍が大陸国家、海軍が海洋国家。根本路線も違えば、目指す方向も西と東と逆になつた

▽昭和18年にアルミ論争

▽航空兵器総局長官の遠藤三郎陸軍中將は「強敵を前にして見苦しい限りであつた」

▽19年2月には毎日新聞の「竹槍事件」

▽「竹槍では間に合はぬ 飛行機だ、海洋航空機だ」  
激怒した東条英機首相

▽37歳の新名丈夫記者を懲罰召集

▽辻棲合わせに召集の250人は硫黄島で玉砕

西園寺政友会総裁の演説(録) わが国民は否でも応でも大戦争をしなければならぬことがあります。この戦争は必死の戦いである。この戦いをなすには、第一に信義を重んずることが必要である。それから国民が大胆でなくてはならぬ。學術がなくてはならぬ。敏活でなくてはならぬ。勤勉でなくてはならぬ。種々の注文がありますが、概してこれをいえば第一に信義の二字が大切である。…

ちよつと国民の態度をみても、多くは悲憤的であり、慷慨的であり、冷嘲的である。いわゆる闊達大度であるとか、あるいは莊重高雅であるとかいふような氣風に乏しい。また多くは他人を排するやうな氣風があつて、他人を愛するやうな氣風に乏しい。かような欠点がある。これは国家の前途に対して、実に憂うべく恐るべきことである。

セオドア・ルーズベルト(Theodore Roosevelt)1858~1919 オランダ系名門の出。副大統領在任中、マッキンレー大統領の暗殺で、43歳で第26代大統領(1901~1909)に就任。パナマ運河敷設権獲得や日露戦争調停など、積極外交を展開した

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)~昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大將。昭和15年第二次近衛内閣で陸相となり、翌年首相に就任。太平洋戦争の最高責任者となる。19年7月サイパン島陥落で総辞職。東京裁判でA級戦犯として死刑

▽予科練(海軍甲種飛行予科練習生)でも、体格のいい者は陸軍に取られ、志願者の半数以上は操縦不適格者だった

▽陸軍は海軍の頑迷ぶりを非難する

▽戦後、東条は「敵であるアメリカよりも、海軍の方がこわかった」

●何でこんなに仲が悪かったのか

▽教育の違い＝海軍はイギリスの指導を受け、陸軍は最初フランス式、後でドイツ式に

▽海軍は軍艦を中心に海の上で戦い、陸軍は歩兵による陸上の戦い。「機械の戦い」と「人間の戦い」

●一番大きかったのは「陸主海従」か「海主陸従」かの主導権争い

▽明治の初めは「海陸軍」が公用語

▽「陸海軍」と順序で陸軍が先になるのは明治5年

▽参謀本部には陸軍の文字がつかないのに、海軍軍令部→山県有朋は「陸軍は主兵であり、海軍は応用支援の兵である」→参謀本部の中に海軍部

▽海軍軍令部が参謀本部と並ぶ形で独立するのは、36年暮れ、日露戦争直前のこと

▽初代海相西郷従道は「陸軍中将」の肩書きで

●海軍を陸軍と対等にしたのは山本権兵衛の剛腕

▽日清戦争の時、川上操六参謀次長に「陸軍は工兵隊で橋を架けて朝鮮に渡る気か」

▽「六六艦隊」を作り、強烈に海軍を主張した山本

▽「海軍あるを知りて、国家あるを知らず」(参謀本部井口省吾少将の日記)

▽凱旋観艦式に初めて海軍軍服を着用された明治天皇。涙を流して喜んだ山本は「これで海軍が陸軍と同列になった」

▽陸海軍の対立は、同列になったことから始まる

●「大陸国家」としての国防方針を訴えた田中義一

▽張作霖爆殺事件で首相を辞職した田中

▽39年6月「随感雑録」

▽「日本の国是は従来の島国的環境を脱して大陸国家となし、国運の伸張を図れ」

西郷 従道(さいこう・つみち)

天保14(1843)～明治35(1902)薩摩藩出身。西郷隆盛の弟。元老。元帥。渡欧して兵制調査。初代海軍大臣に陸軍中将の肩書きで就任。内相など歴任

山本権兵衛(やまもと・ごんべい)

嘉永5(1852)～昭和8(1933)薩摩藩出身で海軍大将。明治26年、大佐の時に西郷海相に進言して老朽幹部97人の整理を断行。31年海相に就任、「六六艦隊」を日露戦争に間に合わせた。大正2年首相となるがシーメンス事件で、12年再度の首相も虎ノ門事件の責任を取り辞職

川上 操六(かかみ・そうく)

嘉永1(1848)～明治32(1899)薩摩藩出身。陸軍大将。陸軍兵制をフランス式からドイツ式に転換する事業に参画。日清戦争では参謀次長として陸軍の作戦計画を指導した。のち参謀総長

田中 義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929)長州出身。陸軍大将。日露戦争で満州軍参謀、戦後国防方針作成の中心となり、原内閣陸相としてシベリア出兵を断行。大正14年政友会総裁。昭和2年首相となり、山東出兵など大陸進出を強行したが、4年の張作霖爆殺事件の責任を取って辞職

張作霖爆殺事件 張作霖は馬賊から北洋軍閥奉天派の首領となり、日本軍の支援で北京政府の実験を握ったが、蒋介石の国民党軍の北伐にあい奉天へ脱出しようとした。関東軍高級参謀河本大作大佐はこの機会に満州占領を企て、張作霖の乗った列車を爆破、死亡させた。田中義一内閣はこの事件で総辞職した

▽維新以来の日本の国是は「富国強兵」「文明開化」

▽田中は第一に政略と戦略の一致を挙げ、「政府が参謀本部の戦略を知らず、参謀本部また政府の外交方針を知らないようではダメだ」

▽第二に主な仮想敵国をロシアとし、陸海軍一致の国防方針を訴えた

●すっかり共感した山県有朋

▽海軍は反発した。本音は田中案が「陸主海従」

▽山県は自ら筆を入れた修正案を作り、陸海軍の協議を明治天皇に上奏した

▽山県案では仮想敵国からアメリカを外し、第一をロシア、第二を清国

▽これでは海軍が困る。仮想敵国に強大なアメリカがあつてこそ、軍艦を造る名目が立つ

▽陸海軍妥協の結果決まった国防方針は、それぞれの主張をそのまま飲み込んだものになった

▽海軍の要求を入れ、実質的にはアメリカをロシア並みの仮想敵国に

▽「八八艦隊」を国防上の第一線艦隊に。第一線艦隊とは、艦齢25年として完成から8年までの軍艦で、8年ごとに新しい軍艦を造ることになる

●問題は、これだけ膨大な軍備を急がせる差し迫った脅威があつたかどうか

▽ロシアとの間に日露協約(40年6月)。ロシアは国内の政治不安で極東どころでなかった

▽アメリカは、日本の満州独占に抗議していたし、移民摩擦もあつたが、外交努力で妥協が成立

▽アメリカ移民は、明治元年サトウキビ栽培の労働者153人のハワイ渡航が始まり

▽2年、会津藩士がカリフォルニアへ新天地を求め

▽移民の本格化は、18年政府が官営事業として奨励してから。ハワイ12万人、本土3万人

▽日露戦争の前後から、ハワイからの移住者が急速に増え10万人。9割がカリフォルニアに集中

▽安い賃金で真面目に働く日本人に、白人労働者は「おれ達の仕事を奪うのか」と日本移民排斥運動

▽サンフランシスコ大地震(39年4月18日)に50万円の見舞金

40  
帝国国防方針(明治44.4.4制定)

甲、帝国ノ国防ハ攻勢ヲトルコトヲ本旨トス

乙、将来ノ敵ト想定スベキモノハ露国ヲ第一トシ米、独、仏ノ諸国之二次グ

日英同盟ニ対シ起リ得ベキ同盟ハ露独、露仏、露清トス。而シテ日英同盟は確實ニ之ヲ保持スルト同時ニ努メテ他ノ同盟ヲシテ成立活動セシメザル如クスルヲ要ス

丙、国防ニ要スル帝国軍ノ兵備ノ標準ハ用兵上最重要視スベキ露米ニ対シ東亞ニ於テ攻勢ヲ取り得ルヲ度(の)トス

国防方針に基づく所用兵力(暫)

陸軍 野戦師団、予備師団各25個トスルガ、財政ノ現状ハ一時ニ此兵力ノ充実ニ着手スル能ハザル事情ニアリ。…先ヅ明治40年度ヨリ19個師団ノ整備ニ着手シ、残余6個師団ノ常設ハ他日財政ノ緩和スルノ時ヲ得テ整備ニ着手ス

海軍 用兵上最重要視スベキ想定敵国ニ対シ東洋ニ於テ攻勢ヲ取ルタメ、最精鋭ナル一艦隊ヲ常備スルヲ要ス。其ノ兵力ノ最低限ハ戦艦凡2万屯8隻、装甲巡洋艦凡1万8千屯8隻ヲ基幹トシ、巡洋艦及ヒ駆逐艦等各若干隻ヲ付シテ、国防上ノ第一線艦隊トス

▽経済問題ということが分かっていなかった。  
 ▽一等国の自尊心を傷つけた「学童隔離問題」  
 ▽ルーズベルト大統領が直接問題解決に乗り出し、  
 日本政府も旅券発行停止を約束

●海軍予算獲得のためのアメリカ仮想敵国

▽島田三郎「日米戦争論は一場の夢物語」

●膨大な軍備計画に財政が耐えられるか

▽返さなければならぬ公債は17億円を突破、利  
 払いだけでも年間1億円

▽緊縮財政と軍備充実の全く相反した宿題

▽陸軍は40年度予算編成の時、19個師団で妥協

▽残り6個師団は「他日、財政の緩和を待つて」

●西園寺はなぜ「この国防方針は作成の仕方が違っています」と云えなかったのか

▽田中義一の提案では、作成の段階から政府も入っ  
 ていた→田中提案通りになっていたら、大正7年、  
 13年、昭和11年の三度の改訂で軍部独走の事  
 態は防げた

▽政党嫌いの山県は、最高の軍事機密が政友会内閣  
 を通じて政党関係者に洩れるのを恐れた

▽原敬は日記に「この国防方針は軍部だけで決定し  
 たもので、閣議の決定ではない」の西園寺の言葉

▽財政と関係のある所用兵力は、西園寺一人が「閲  
 覧」を許されただけ

▽軍備充実の緩急の順序は予算を握る内閣の裁量に

●国防方針には三つの大きな誤り

①軍部の意見だけで決まり、政治が口出し出来な  
 くなった

②国防と軍備を混同し、国防力とは外交、経済、科  
 学など、国の総合力であるとの理解がなかった

③国防は軍人が握るという誤解が、軍部はもちろん  
 政治家や国民にも根強く植え付けられた

●第二次西園寺内閣で陸軍と正面衝突

▽「桂園時代」桂太郎→西園寺公望→桂太郎→西園  
 寺公望→桂太郎

日本人学童隔離問題 明治39年11月  
 11日、サンフランシスコ市学務局は  
 公立学校の日本人学童93人に、中国  
 人街にある東洋人学校に転校するよ  
 う命令を出した。大地震で学校が焼  
 失し収容能力がなくなったというの  
 が理由だが、全市の学童25000人か  
 ら見れば、明らかないやがらせだっ  
 た。中国人はすでに隔離教育を受け  
 ている、日本の世論は「中国人と一  
 緒にするのか」と激高した。日本政  
 府の抗議に、ル大統領は直接市当  
 局を説得、学童隔離を停止させた

島田 三郎(しま・さぶろう)

嘉永5(1852)～大正12(1923) 東京生まれ。政治家。明治7年横浜毎日新聞を創刊。クリスチャンとなり、人道主義の立場から、廃娼運動、労働者の解放運動に力を入れ、日露非戦論を説く。代議士としてシーメンス事件、足尾鉍毒事件を追及した。衆議院議長

国防方針でのアメリカの位置付け

「亜米利加合衆国ハ、我ガ友邦トシテ交誼ヲ保維スベキモノナリト雖モ地理・経済・人種・宗教等ノ関係ニ於テ、他日劇甚ナル衝突ヲ惹起スルコトナキヲ保セス」

桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州出身。元老。陸軍大将。陸相を経て明治34年首相。翌年日英同盟を締結、日露戦争を遂行した。43年韓国併合。政党懐柔にニコニコしながらボンと肩を叩くので「ニコボン宰相」の名も